

近代における上海金融センターの 形成と発展 (1850~1927)

曾 憲 明

はじめに

上海は中国大陸の南北海岸線の間差点に位置し、かつ長江の東端にあたる。周囲は中国一豊かな地域といわれた長江デルタであり、重要物産の輸送ルートである中国の河川舟運と外航航路との接合ポイントにもあたる。その結果、宋代以来の、とりわけ明、清朝期の発展により、上海はすでに開港以前において発達した綿工業、商業、海運業をもつ中国東部の一大港湾都市となった¹⁾。開港後、上海は安定した環境に恵まれ、国外市場と巨大なる中国の奥地との中継点に立地することによって、対内、対外貿易が急速な発展を遂げた。こうした商業から始まる発展は金融、交通、通信、そして工業など他の産業の発展に刺激と動力を与えた。その後、各産業部門は互いに連携、依存しながらも、上海の都市発展に各自の役割を演じた。その過程で、最初は内外の貿易の急成長によって、次は工業の発達に応じて、上海では金融機関の集中が見られ、貨幣市場、証券市場、金銀市場、為替市場などをもつ金融センターが次第に形成されていった。

1) 1843年開港前の上海は主に中国南北沿海地区、長江流域と太湖流域の物産を扱う国内貿易の中継港であった。主な交易物には大豆および大豆製品、雑穀、綿布、綿花、米、砂糖、桐油、竹、木材などが数えられる。清朝前期の1684年~1757年の間、小規模な国際貿易も存在したが、日本の長崎と東南アジアの諸地域に限られたものであった。輸出したのは生糸、綿布、陶磁器、絹、紙、茶と漢方薬などを中心とし、輸入品には銀、銅、海産物、漆器、真珠、砂糖、香辛料などが大宗であった。1757年後、外国貿易は広州一港に制限されたから外国船の到来はまれになった。張仲礼主編、『近代上海城市研究』上海人民出版社1990、98頁を参照。

1843年の開港以後、上海において国際都市が形成され、それに伴って上海独自の対国内外経済関係も形成されていった。このような独自の政治、経済環境下に置かれていた上海金融センターは、国民経済とは異なる発展の論理をもった一自由港に固有の金融機関の集合体であると理解できる。従って、本稿は上海の自由港的側面を重視する立場から、この金融センターの重要な構成部門、錢莊²⁾と銀行の発展とその背景の分析を行う。その具体的な問題関心のひとつは、錢莊、外資系銀行、中国系商業銀行は上海金融センターの成立過程において、いかなる役割を發揮したのか。またもうひとつ問題関心は、上海の金融センターに国家権力が及ばない時期において商業銀行の勢力はいかなるものであったのか、ということである。

上海が都市として成長する過程において金融業が果たした役割は、1990年代の今日には再び認識されつつある。現在、上海の「浦東開発」においては、将来上海を「国際的な貿易・金融

2) 「錢莊」(qian zhuang), 明、清朝時代から1950年代初期まで中国大陸に存在していた伝統金融機関の名称である。商業取引に伴随する決済業務や資金の貸借、各地方ごとに異なる貨幣体系の間での両替の必要性から生まれた錢莊は、無限責任制に基づき、個人企業あるいは合名会社的な性格を持ったが、また一年あるいは数年ごとに利益を分配して解散する。大規模の錢莊は預金、貸出業務の以外、為替手形、約束手形をも發行した。またときには特定地方において紙幣をも發行した。小規模の錢莊は貨幣の両替だけを業務とするので、「錢店」とも呼ばれる。江蘇、浙江、福建各省では「錢莊」と呼ばれたが、北京、広州、天津、済南、鄭州などでは、「銀号」と看板に書かれ、武漢、重慶、成都、徐州では両名称併用の形となった。錢莊は、次第に地方銀行に転換していったが、1952年12月にはすべての私営銀行とともに公私合同経営の形で国有化された。

センター」にするという計画が表明されている。このような時代背景を考慮するならば、上海における近代的貿易・金融センターの形成と発展についての歴史経緯の再検討は、単なる経済史的研究にとどまるものではなく、今日の上海における金融業の再構築、その発展の将来性の分析と問題解明にとっても、きわめて重要な課題であるといえよう。

本稿は19世紀半ばから20世紀30年代までの上海銀行業の変容過程を辿ったうえで、かつて上海の有力銭荘の一つ、福康銭荘の事例を取り上げて、それらの預金、貸し出し関係、さらには他の銭荘、中国系銀行、そして外資系銀行との業務提携など多方面にわたって、その変容ぶりを描きだす。そして、中国系商業銀行の成長を中心に上海金融市場における構造的変化を紹介しながら、前述した銭荘、外資系銀行、中国系商業銀行の役割分担についての諸問題点を中心に、上海における金融センターが成立しうる条件を探る。

I 上海における金融センターの成立過程

本稿では、開港から1860年までについて、簡単にふれたのち、上海金融業の確立期である1860～1895年の時期、清朝末期にあたる1896～1911年の時期、そして中国系銀行、外資系銀行、銭荘の三極体制が成立した1912～1927年の時期、この三つの時期に分けて、分析する。

(1) 開港後の銭荘：1843年～1860年

開港以前の上海の銭荘業とその起源については、関係資料が極めて乏しく、1961年に初出版された『上海銭荘史料』（中国人民銀行上海分行編）に記載されたものがおそらくそのほとんどである。ここではこの資料に依拠して、開港前の銭荘業の概況を説明する。

上海の銭荘業は清朝・乾隆年間（1736～1795）から興隆し始め、乾隆41年（1776年）には、すでに銭業公会という同職団体が出現した。嘉慶2年（1797年）の記録によって、1776年～1796年の間に、上海ではのべ106の銭荘が開業

していた。銭荘業が独立した業種として存立・隆盛してきたのは、商業、海運業の業務拡大、および当時の中国各地に異なる貨幣体系が存在したことによる両替の必要性とに最も関係があるといわれる。しかも19世紀前半に、上海の銭荘の業務活動にはすでに銀の代わりに一種の信用証書である「荘票」（銀票とも呼ばれる）が流通と支払いとの特定分野に使われ、商人の歓迎を受けた。これも銭荘業が発展してきた一因とみられる。こうした銭荘は遊休貨幣を資金需要者に供給する機能を持ち、初期資本主義社会においてももっとも信用のある金融機関として、とくに上海を含む江南地方で次第に発展してきた。ただし銭荘の出資者は主に一人あるいは数人のみで構成され、「共通利害関係における絶対的相互信頼」³⁾の原則にもとづき、対人信用と無限責任とに立脚していた。したがって、その経営規模は小さかった。これも当時の社会的な生産力、商業規模に規定されたものと理解できよう。

開港後、中国各地へ輸出される外国商品、あるいは海外輸出向けに各地から集まった中国物産は上海を中継するようになり、上海は次第に中国最大の国際貿易港となっていった。しかし、輸出入貿易に携わった新設の中小洋行と中国商人との取引体制は未確立で、両者は商品取引をバーター貿易⁴⁾に頼らざるをえなかった。そこで銭荘は、新設洋行と中国商人との間にはいり込み、荘票の発行によって、中外商人間のパイプ役を果たし、貿易金融を本格的に行うようになった⁵⁾。外国洋行、商人による荘票の受け入れは、銭荘が流通と信用との両面において、強固な経済基盤を擁することの証明になると同時

3) 香川峻一郎著『銭荘資本論』1947、83頁を参照。

4) 浜下武志『近代中国の国際的契機』東大出版会1990、123～128頁を参照。

5) 輸入の場合、中国商人は銭荘に5～20期限の荘票の発行を依頼してもらって、それを洋行に提出次第当該の輸入商品を手に入れる。洋行は満期の荘票を用いて銭荘にお金を請求する。その時点にもし商品がまだ銭荘に商品購入に相当する資金を返済していなかった場合、銭荘は荘票の額面通り洋行に代金を支払う。【上海銭荘史料】18頁を参照。

に、錢莊がもつ短期金融を行う商業銀行的な性質が外国同業者に認められた結果ともいえよう。

莊票のほか、いわゆる「上海両」⁶⁾が国際為替、貿易の計算単位として採用されたことも錢莊にはかなりの利益をもたらした。当時、銀両圏⁷⁾に所属していた上海では、スペイン銀貨が地域住民の信頼を得て、対外貿易の決済通貨として用いられていた。1840年代にはその鑄造が停止されたが、1850年代には、生糸と茶との輸出増によってスペイン銀貨に対する需要は却って高まった。他方、1853年以後、内戦によって、国内貿易ルートが遮断されると、スペイン銀貨のプレミアムは急騰した。上海の錢莊業界は、これによって発生した混乱を収めるために、1856年には上海両を唯一の記帳単位として、内外貿易・為替に使わせるように規定した。錢莊業界のこの規定は、外国商人、洋行にとって、必ずしも便利な貿易決済制度とはいえないが、錢莊の規定に従うこと自体が、錢莊の金融界における統率力の強さと外国金融関係者が上海現地の金融慣行を尊重するということとの反映にほかならない。その上海両とスペイン銀貨あるいはメキシコ銀貨との交換レートは後に上海金融市場において重要な相場の一つとなった。錢莊はそうした銀貨と上海両との兌換業務で莫大な利潤を得たとされている。

(2) 金融業を兼業する洋行、外国銀行の活動

1834年に、東インド会社の対華貿易特権が廃止され、当時の中国における唯一の涉外金融活動すなわち外為業務のすべては広州に拠点をおく英、米の大洋行に引き継がれた。1843年以後、このような外国の大洋行が一手コントロールする国際為替体制は上海にも持ち込まれた。すなわち資本力のある有力洋行は銀行を通さず、外

国商人から為替手形を購入したり、インド宛あるいはイギリス宛の為替手形を商人に売却したりすることである。洋行に付属する形で行われたこのような金融活動は1840年代後半、銀行の挑戦に合うようになった。1847年には、イギリスのオリエンタル銀行(麗如銀行)が率先して上海に駐在所を設けた。それに続いて1854年には匯隆銀行(the Commercial Bank of India)、有利銀行(the Mercantile Bank)、1858年にはアグラ銀行(the Agra and United Service Bank)、麦加利銀行(the Chartered Bank of India, Australia & China)の支店が設立された。イギリス系銀行以外、フランスの(Comptoir d'Escompte de Paris)『パリ割引銀行』も1860年に上海で支店を設立した(第1表)。

この一時期の外国銀行の活動は、主に国際為替業務に集中しており、貯蓄と一般の貸し付け業務は行わなかった⁸⁾。

II 上海金融体制確立期(1860~1895)

1. 1860~1870年代の上海金融業

(1) 1860年以後の上海錢莊業

1850年代後半から1860年代半ばごろまで、上海の金融機関の事情を一変させた大事件がいくつも発生した。太平天国と清朝との間の内戦、第二次アヘン戦争の結果による長江の外国船への開放と流域内の通商都市の増加、そして綿花危機などである。しかし、中国系と外資系とは異なった影響を受けた。まず上海の都市としての性格の変化⁹⁾によって、1850年代前半から、上海旧市街地(南市)にある錢莊の多くは租界(租界は旧市街地の北に位置することから、一

8) 汪敬虞「十九世紀外国在华金融活動中の銀行和洋行」『歴史研究』1994.1, 120~123頁。

9) 1853年9月に起こった太平天国支持の三合会会員による上海旧市街地「南市」での反乱事件(1853~1855)をきっかけに、大量の上海市民が外国人居留地の「北市」(現在の上海市中心部)に一時避難あるいは移住した。租界は「華洋雜居」の国際都市へと変貌したが、その際、清朝政府の行政、司法権から独立した市政機関が新設された。関係諸外国は上海都市地域の清朝と太平天国の争いに対して武装中立を宣言した。

6) 上海で通用する虚銀両単位。例えば上海で鑄造された馬蹄銀は、その重量数にプレミアムを加え、0.98で割るとその名目上海両数となる。 $52 + 2.75 = 54.75$, $54.75 \div 0.98 = 55.86$ (上海両)

7) 当時の中国には広東のような銀貨圏地域も存在した。陳春生「清代広東的銀元流通」『中国錢幣』1985.1, 46頁を参照。

第1表 外資系銀行名対照表

	欧 語 名	中国語名	上海支店 設立年
1	The Oriental Banking Corp.	麗 如 銀 行	1847
2	Commercial Bank of India	匯 隆 銀 行	1851
3	Mercantile Bank of India, London & China	有 利 銀 行	1854
4	Agra & United Service Bank, Ltd.	呵 加 刺 銀 行	1858
5	Chartered Bank of India, Australia & China	麦 加 利 銀 行	1858
6	Comptoir d'Escompte de Paris	仏 蘭 西 銀 行	1860
7	Hongkong & Shanghai Banking Co. Ltd.	匯 豐 銀 行	1965
8	Deutsch-Asiatische Bank	德 華 銀 行	1890
9	Russo-Chinese Bank	華 俄 道 勝 銀 行	1896
10	Banque de l'Indochine	東 方 匯 理 銀 行	1899
11	Banque Belge Pour l'Etranger	華 比 銀 行	1902
12	International Banking Co.	花 旗 銀 行	1902
13	Netherlands Trading Society	荷 蘭 銀 行	1903
14	American Oriental Banking Corporation	美 豐 銀 行	1918
15	Asia Banking Corporation	友 華 銀 行	1919
16	The Bank of Philippine Islands	菲 律 賓 銀 行	1919
17	American Express Co.	運 通 銀 行	1919
18	Equitable Eastern Banking Corporation	大 通 銀 行	1921
19	P & O Banking Corporation	大 英 銀 行	1925

般に北市と呼ばれる)へと移転した。以後、上海の地元の金融勢力は南北両市に両分並立し、やがて有力錢莊は北市に集中するようになった。それに加えて、1860年前後の一時期には、上海周辺の、従来錢莊が集中する商業都市蘇州、寧波などが相次いで太平天国軍の手に陥ったので、それら地方の有力錢莊経営者、商人も大量に租界内に移った。かれらは次第に拡大する海外との貿易から生ずる資金需要に応え、多くの新規錢莊を開いた。このような各地から租界に流入してきた錢莊は北市で新たな金融街を形成した。また票莊¹⁰⁾もこの時期に大挙上海に移転し、錢莊への貸出と国内為替とに力を入れた。こうした錢莊、票莊、すなわち商業金融資本の上海

への移入という事態は、1860年前後の太平天国軍の江南地域の一時占領によってこの地域の金融業の勢力分布が徹底的に変化したことを意味した。結果的に、上海に有力錢莊の一極集中が見られ、後の金融センターの基礎の一角が築きあげられた。

第二次アヘン戦争後、上海と長江流域の各開港都市および周辺地域との中継取引は急増した。莊票の流通範囲も一層拡大した。錢莊は輸出入商品を扱う中国商人たちに信用を供与したり、商品売買に際して資金を前貸ししたりした。また、盛んな内外商業取引がもたらした両替業務の増大により高収益をあげた。

ところが大量の新規錢莊が開業するにつれ、新規開業者のなかには手形発行の規定を守らないものがしばしば出現し、手形=莊票の信用度、ひいては上海の金融市場、対外貿易にも悪影響をもたらす恐れが出てきた。貿易・流通をめぐる内外の商取引に深くかかわっていた上海の有力錢莊の経営者たちはこれに対処するために、錢業公会を通じて、1859年、1863年と二度にわ

10) 中国の伝統的金融機関には、寧波、紹興出身者が経営する上海を中心とする地域の錢莊の他にも、清朝の乾隆・嘉慶年間(1735~1820)から辛亥革命までには中国全土に遍在した「票莊」(多くは山西省出身の大商人によって経営される。票号、銀号とも呼ばれる)が存在する。票莊は清朝政府の金融代理として、小額紙幣を発行し、大商人や錢莊に貸し付けを行うほか全国範囲の為替を扱うなど、その営業範囲は一時全国に及び、「票莊遍天下」といわれた。

たり、莊票に関する規定を改めて公布した¹¹⁾。二度目には、公会に所属する各会員錢莊は(いわゆる匯劃錢莊: 錢莊中大規模な営業内容を持っているものを普通の錢莊に対して匯劃莊として区別する。特に上海における錢業公会に所属する錢莊に対して呼ばれるものである。匯劃: 上海錢莊業専門用語, 手形交換尻決済, 振替の意味) 会員錢莊から出される莊票しか受け取らないと宣言し、莊票の従来の高い信用が守られた。強力な同職団体の存在はこうした錢莊自身の信用維持には重大な役割を演じた。

1860年代の貿易の拡大につれ、華・洋間の人脈は買弁をはじめ、錢莊職員、洋行の外国人職員たちの間にまで広がった。外資系銀行は錢莊を熟知する買弁を通じて、莊票だけの担保で上海錢莊に対して短期融資を与えはじめた¹²⁾。それによって、1860年代末ごろから、錢莊は外資系銀行から資金融通を受け、大規模な貿易金融を行うことができるようになった。

(2) 外資系金融機構の変化と発展

1860年代には、大洋行は航運、保険、金融など貿易周辺事業への投資とその経営とを重要視しはじめたのである¹³⁾。

これらの貿易周辺事業は、多額の資本投入を必要としたため、銀行の役割は増大した。そこで中国の主要都市に支店を、香港に本店を置く銀行を設立する動きが大洋行の間に広がった。このような大洋行の事業転換の思惑に応えるように、1865年3月に香港で匯豊銀行が設立された。同行の取締役会は有力洋行の代表者達から構成されており、大洋行の「金融連合」¹⁴⁾ とし

ての性格を有していたことがわかる。そのときまでほとんどの大洋行が各自に営んできた金融業務は匯豊銀行が担うようになり、商社が金融業を兼営する時代に終止符が打たれたのである。

匯豊銀行上海支店は、最初から、外国為替取引だけでなく、設立者であり同時に顧客でもある各洋行との密接な協力により、種々の事業の中心的存在になっていたため、当初から資金運用面での割引・貸付の比重が相当高かったといわれた¹⁵⁾。それを主に支えていたのは預金の形で銀行に預けられていた大洋行の流動資金と大量の中小洋行、外国商人の預金であった¹⁶⁾。

2. 1870年以後1890年までの上海金融体制とその背景

(1) 貿易・金融センターの出現

1870年代に入ると、輸出入貿易における上海の中心的地位が確立した。大小の錢莊は、各地方都市をはじめ農村地域においても預金、貸付、為替、そして手形割引などの金融業務を行っていた。他方、遠隔地金融取引を主要業務とする票莊は、支店をもつ国内諸都市あての高額為替業務を独占した。そして、外国商人、洋行向けの国際為替業務は外資系銀行によって行われた。

この時期、錢莊と外資系銀行との関係はより密接になってきた。外資系銀行による買弁責任制(Chop Loan)の形態を取った錢莊への割引・貸付金額は、1878年8月の時点で300万両に達したといわれる¹⁷⁾。外資系銀行はこうした錢莊への融資を通じて、上海金融市場における全体の資金需給と金利水準に影響を与えた。

1870・80年代の錢莊は、構造的には以前と変わりがなかったが、票莊、外資系銀行からの融

11) 「上海錢莊史料」21頁。(North China Herald 1859, 6, 4; 1863, 3, 7.)

12) 外資系銀行の現地業務の大部分は「買弁間」(華帳房とも呼ばれる)という中国人買弁を支配人とする部門によって行われた。その「買弁間」は外資系銀行内にあった錢莊部門と言うこともできよう。外資系銀行と上海錢莊との密接な関係が構築されていく過程において、「買弁間」の果たした役割は絶大であった。それについては別稿で論じたい。

13) 浜下武志、『中国近代経済史研究』東大東洋文化研究所報告, 1989, 102頁を参照。

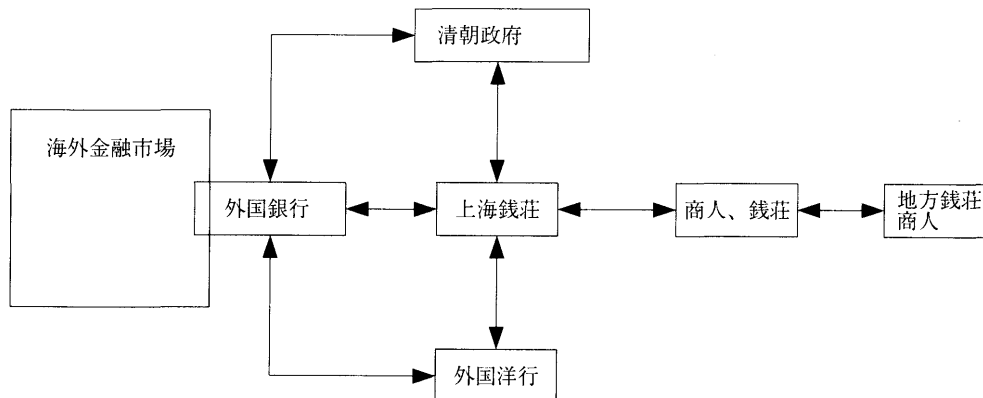
14) 同前, 104頁。

15) 石井寛治「イギリス植民地銀行群の再編——1870・80年代の日本・中国を中心に——」『経済学論集』(東大経済学会)第45巻第3号, 1979, 52~53頁。

16) 張仲礼編『近代上海城市研究』, 264頁。(North China Herald, 1866, 8, 25)

17) 汪敬虞『十九世紀西方資本主義對中国的經濟侵略』, 人民出版社1983, 178頁。

第1図 1880～1890年代上海金融市場の資金流れ



資を利用することによって、自己資本の数十倍の商業取引を行うことができたのであった。したがって、投機の破綻、戦争などによる金融危機の発生に際して、多数の錢莊が連鎖的に倒産したのも不思議ではない。特に、1882・83年の金融危機の際¹⁸⁾、錢莊は大打撃を受けた。以下の上海の錢業公会に所属する錢莊数の増減状況をみても、当時の錢莊が苦境に陥っていたことがうかがえる。

	南市	北市	合計
1876	42	63	105
1883	23	35	58
1886	31	25	56
1888	25	37	62

(資料出所：『上海錢莊史料』32頁)

但し、1880年代後半にはいると、上海は正常な状態へと戻った。1885年以後、貿易総額が従来の水準へと回復し、そして増加しはじめた(第2表)。それによって、錢莊も繁栄を取り戻したと思われる。1880年代後半以降は、貿易取引の増大につれて、金融業務の量も激増し、錢莊間の決済業務が急増して、従来の方法では処理が難しくなったほどでした。この問題の対応策として、錢莊業者は1890年に、手形交換所の

第2表 上海輸出入金額統計 (1882-1890)

(単位：万海関両)

年度	輸入	輸出
1882	1505	2568
1883	1146	2334
1884	747	2660
1885	1577	2688
1886	1436	3023
1887	1581	3020
1888	2328	3280
1889	1441	3814
1890	1438	3020

出所：徐雪均編『上海近代社会経済発展概況 1882～1931』18頁

原形である匯劃總會を設立した。上海では、中国国内の金融センターとしての活動と、これを世界市場に結びつける活動とが一体となって機能していたが、このうち国内金融センターとしての活動を支えたのは錢莊だったのである。

1880年代末には上海の貿易・金融センターとしての基本構造が確立したが、外資系「銀行」と錢莊との結合はこの基本構造の中核部分であった。両者は卸しと小売りのような分業関係によって結ばれていたのである(第1図)。両者とも短期金融を重視する商業金融機関であったことが結合の一大の理由としてあげられる。

1891年には、内外貿易の発展は一つの頂点に達した。内外貿易と直結した形で、上海の船舶製造・修理業、電信事業、紡績業なども成長し

18) 大金融業者の生糸投機失敗により、1883年秋に、上海において金融恐慌が起こった。浜下武志，前掲書，306頁。

た。この時期には、匯豊銀行の成功に着目し、諸外国もイギリス勢力に対抗あるいは追隨する形で、中国で自国の利権を代弁する特殊銀行の開設をはじめた。その結果、1890年に独亜銀行（Deutsch-Asiatische Bank）、1893年に横浜正金銀行が上海で支店を開設した。この二行と、そして日清戦争後に支店を開設した露清銀行（Russo-Chinese Bank, 1896）、インドシナ銀行（Banque de l'Indo-Chine, 1899）、台湾銀行（1899）とは自国政府のバックアップを受けながら、預金、貸付、借款、為替と紙幣発行などの金融業務分野へと進出し、既存のイギリス系商業銀行と競合しはじめた。

（2）外資系銀行の借款業務 （海関税の役割について）

1870年代以後、外資系銀行特に匯豊銀行は清朝政府に対する資金の融通や債券発行の引き受けを行うようになったが、これは輸出入貿易の発展が清朝政府に海関税という新たな財源をもたらしたことと関連していた。海関税を担保に借り入れた外債は、清朝政府にとっては実質的には外債としての負担にはならなかったものであった。1885～1894年の間、借款返済にあてられるのは、平均で年海関税収入の15.8%にすぎなかった¹⁹⁾。この時期の借款が外資系銀行に高い利潤をもたらしたことは確かであるが、これらは通常の経済取引の範囲を逸脱するものではなかった。このような商業性借款と後述の日清戦争後諸外国の国策と利権とに絡んだ賠償目的の対中借款との違いには、十分留意されるべきであろう。

III 清朝末期の試練（1896～1912年）

1. 1895年以後の上海金融体制の変化

（1）中国通商銀行の設立

日清戦争後は、海関税をはじめとする政府の重要財源の喪失によって、政府による近代産業の継続的な育成・強化は不可能となった。かつ

19) 徐義生編『中国近代外債史統計資料』中華書局1962、5頁。

て海関税に依存していた既存の政府系企業の維持すらも困難な局面に陥った。他方、戦後の鉄道建設ブームもあいまって、鉄道建設用の外国借款の処理が緊急な課題となった。その背景の下、当時清朝政府の鉄道事務大臣であった盛宣懷は、鉄道建設に必要な資金を長期かつ安定的に供与できるのは近代的銀行のみであると認識した²⁰⁾。彼は当時政府系の鉄道、海運、電信、製鉄と鉱山会社の経営権を一任されていたが、製鉄所と鉄道と銀行との三者間の関係の重要性を当事者として痛感していた²¹⁾。

中国通商銀行の資本金は第3表に示されたように政府系企業と官商（日本の政商）からの出資で成り立っていた。当銀行は発券、預金、貸付、国内為替など広い範囲において金融業務に携わっていた。ただし、1905年以前の預金の内枠は主に政府資金、政府系企業の流動資金によって構成されていたが、1905年以後は鉄道建設用の外国借款も預金の大きな部分を占めた。そして、中国通商銀行の貸付業務は、対商業機関と対政府系企業との性質が異なる二つの部分によって構成された。対商業機関の貸付は完全に商業金融の枠組に所属し、当時の上海の外資系銀行の業務内容と大差なく、主に銭荘、貿易商、洋行に対する短期融資であった。一方、対政府系企業の融資は企業のメインバンクが行う救済貸付、資金導入の色合が濃く、中国通商銀行は政府系企業の資金導入機関としての特殊銀行の一面を持つことが明白である。それは上海本店の貸付分類表の内枠（第4表）と企業別の貸付統計（第5表）を通して観察できる。

中国通商銀行は完全に匯豊銀行を模倣し、本

20) 中国人民銀行上海分行編『中国第一家銀行』1982、資料編65頁。「……謹略云鉄政奉旨招商、逾年無効、推原其故、華商無銀行、商民之財無所依附、散而難聚。現与熟悉商務員紳集議、鐵路收利遠而薄、銀行收利近而厚、若使銀行權屬洋人、則鐵路欲招華股、更無弁法。國家本有開銀行之議、鐵路既以集華股、俾商弁為主、銀行似亦應一氣呵成、交相附麗。」盛宣懷『愚齋存稿』第25卷、6頁。

21) 同上書、資料編72頁。「……今因鉄廠不能不弁鐵路、又因鐵路不能不弁銀行……」盛宣懷『愚齋存稿』第25卷、15頁。

第3表 中国通商銀行創立出資者一覽

出資者	株数(1株50両)	金額(両)	出資者経歴
輪船招商局	16,000	800,000	官督商弁企業
張振勳	2,000	100,000	商人, 南洋商務大臣, ベナン, シンガポール領事歴任, 煙台張裕醸酒公司創業者
盛宣懷	14,600	730,000	官僚
嚴信厚	1,000	50,000	政商, 上海華商総商会初代会長
電報局	4,000	200,000	官督商弁企業
洪植臣	800	40,000	不詳
梁幹卿	200	10,000	不詳
その他	2,585	129,250	
輪船局各支局	3,350	167,500	官督商弁関係者
外地	92	4,600	
合計	44,627	2,231,350	

出所:『中国第一家銀行』107, 108頁

第4表 中国通商銀行(上海本店)貸付分類表

(単位:万両)

年末	一般企業	国内商業	外国洋行	錢莊	外資系銀行
1897	91.7	85.6	32.2	35.8	9.5
1898	44.8	42	64	18.7	—
1899	78.3	69.9	25.6	1.5	—
1900	29*	88	121.2	4.8	—
1901	25	23.8	198.7	24.7	30
1902	33.8	17.4	78.5	38.8	—
1903	—	91.7	21.7	51	—
1904	—	49.3	4.5	47.2	—
1905	42.5	253.3	74.6	113.5	—
1906	72	141.5	94	74.3	3
1907	61	289.7	49.1	78.5	—
1911上半期	100.3	344.3	79	289.6	42.5

出所:『中国第一家銀行』42頁

*政府系の漢陽鉄工所, 萍郷炭鉱を支援するために一般企業融資が大幅減少した。

第5表 企業別貸付金額統計

(単位:万両)

企業名	年月	貸付金額	企業性質
華盛紡績総廠	1899	54.6	政府系
漢陽鉄工所, 萍郷炭鉱	1902	65	政府系
大純綿紡廠	1898.3-5	5.3	民族系
大生綿紡廠	1898	7.4	民族系
裕源紡績廠	1899	5	民族系
恒豊紗廠	不詳(1911年以前と推定)	12.5	民族系
裕泰紗廠	不詳(1911年以前と推定)	6	民族系
振華紗廠	不詳(1911年以前と推定)	15	民族系
International Cotton Manufacturing Co. Ltd.	1897.12-1898.3	20	外資系
Soy-Chee Spinning Co. Ltd.	1897.12-0898.3	10	外資系

出所:『中国第一家銀行』25, 148頁

店と重要支店の総支配人（洋大班）が外国人の銀行専門家を任命し、その経営を完全に外資系銀行に則した形で行なった。当時の中国の人々の認識では外資系銀行と異なることはなく、一般の中国人にとっては敷居の高い存在であった。したがって、この銀行の設立が、すぐに上海の金融体制の構造変動をもたらしたわけではなかったのである。上海の金融体制は、1896年後以降も、依然外資系銀行と錢莊との両極体制によって支えられていたのである。

（2）上海金融市場の拡大

中央政府の苦境とは対照的に、日清戦争後上海金融市場の規模は一層拡大した。戦争後の貿易量の増加、また下関条約の製造業従事権の規定による開港都市で外資系工場が自由に設立できるようになったことなどが金融業の成長の原動力になったといわれた。20世紀初頭に入ると、上海の金融市場の規模は義和団事件に支払われた賠償金の処理によってさらに拡大したのである。

外資系銀行は賠償金、あるいは対中借款の返済金を上海の錢莊に貸出した。このため、1900年以後、外資系銀行の上海錢莊に対する短期貸出（chop loan）が急増し、金額は1900年前の年間200～300万両から1908年の1225万3千両²²⁾、1910年の2000万両近くまでに上昇したといわれる²³⁾。同時に、外債返済のために、清朝政府は上海海関の関税収入の一部、そして全国各地から徴収した各種の税金を上海に集中した。上海地方政府はこれらの資金を上海の錢莊に預け、外債の返済期日になるとこの債権を銀建手形で外資系銀行に渡した。以後、この資金は外資系銀行の対錢莊融資、つまり chop loan として利用されることが多かったと考えられる。このように急増した chop loan と「道庫存款＝政府預金」に支えられ、上海錢莊の営業活動は急速に

拡大したのである。錢莊の数も、この一種の政府預金のためもあって、1903年の82行から1908年の115行までに増加した²⁴⁾。

二十世紀に入ってからは、為替に加えて、貸付、賠償金受取、借款の供与なども外資系銀行の主な業務内容となった。その銀行業務の拡大に応じて、上海で新たにアメリカ、ベルギー、オランダ三ヶ国の銀行支店が開設された。（Banque Belge Pour L'Etranger 1902, International Banking Co. 1902, Netherlands Trading Society 1903）同じ時期には、中国系銀行の数も前述の中国通商銀行を含めて10行へと増えてきた²⁵⁾。ただし、そのうち、戸部銀行は中央銀行的な、また交通銀行は国策銀行的な性質をもつ国家銀行でした。残る中国系商業銀行は外資系銀行と有力錢莊とは比較できないほど弱小なものでした。

2. 上海の金融恐慌

1910年代後半に、錢莊に対する外資系銀行の資金供給が最高水準に達したが、投機の風潮も同時に助長された。1908年には、二回にわたって、錢莊業界は商業界の投機失敗の影響を受け、危機寸前に陥った²⁶⁾。1909～1910年には、世界的なゴム投機の嵐にさらされ、上海の金融市場は未曾有の金融危機に直面した。

24) 『上海錢莊史料』94頁。

25) 1911年にまで上海で本店あるいは支店を開いていた中国系銀行は以下の10行。中国通商銀行（1897）、戸部銀行上海支店（1905、1908年大清銀行と改名され、1911年辛亥革命以後現在まで中国銀行と称される）、四川瀘川源銀行上海支店（1906）、信成銀行（1906）、浙江興業銀行（1907）、四明商業儲蓄銀行（1908）、交通銀行上海支店（1908）、裕商銀行（1908）、浙江銀行上海支店（1910）。

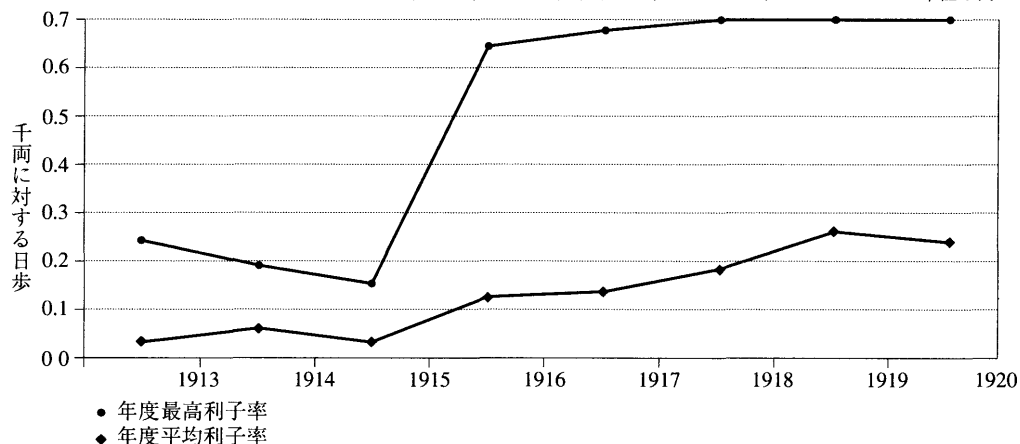
26) 徐鼎新、錢小明『上海總商會史1902～1929』上海社会科学院出版社1991、116頁。1908年9月、元ドイツ系洋行買弁の上海綿花商人呉氏兄弟が株式の投機を失敗で50万両の負債を負い、身を隠した事件と同時に、買弁である徐国祥、朱陳初両紗商と慎泰恒石炭商店の劉柏森とが同じく株投機の失敗で破産した。錢莊の資金繰りが恐慌発生寸前の状態に陥った。幸い、上海地方政府と上海商務總會との担保で、江蘇省政府金庫、匯豐銀行が共同で三百万両の緊急融資を行った結果、金融恐慌が回避された。

22) 西村閑也「中国における国際銀行業1890—1913」法政大学経営学会、経営志林第32巻第4号を参照。

23) 『上海錢莊史料』60頁、唐振常主編『上海史』上海人民出版社1989、370頁。

第2図 上海金融市場金利水準推移 (1913~1920)

単位：兩



出所：『上海錢莊史料』629頁により作成

ゴム事業の株式投資を中心とした投機活動に熱中した中心人物は、ほとんどが錢莊経営者と買弁商人との二重の身分をもつ者であった²⁷⁾。彼らは外資系銀行との密接な関係を利用して、巨額の資金を入手したといわれる。しかし、ゴム消費大国アメリカがゴムに対する消費制限の政策を打ち出した途端に、ゴムの国際価格が暴落し、多くの錢莊が倒産に追い込まれた。さらに辛亥革命の影響で、有力錢莊の連鎖的倒産事件がまた発生した。上海の錢莊数は1908年の115行から、1912年にはわずか28行²⁸⁾に減少してしまっただけである。

1911年の金融恐慌は外資系銀行と錢莊との関係には重大な変化をもたらした。外資系銀行の対錢莊の短期融資 chop loan が停止されたのである。銀行対錢莊という基本構造が変わらなかつたものの、錢莊の上に位置する銀行の存在は外資系銀行の退出によって、一時空白となり、外資系銀行の上海金融市場における重要性も、錢莊との結合が弱まったことにより、低下しは

じめた。やがて、第一次大戦後、成長してきた中国系銀行はこの空白を埋めて、上海金融市場の主役を演じるようになったのである。

IV 中国系銀行、錢莊、外銀の三極構造 (1912~1927)

1. 錢莊の継続発展

(1) 錢莊の再生と発展

恐慌以前の錢莊の経営者の多くは自ら貿易商人でもあって、外資系銀行の融資を利用し、大規模な貿易活動を行っていた。このような錢莊のほとんどは、金融恐慌に遭遇すると外資系銀行からの短期融資を返済できず、信用を失って倒産してしまつた。他方、金融恐慌で生き残つた錢莊の経営内容はそれと大きく異なり、抵当貸付を中心とする業務を行っていた。1913年以後、各産業の生産、内外貿易が徐々に正常に戻ると、上海金融市場の資金需要も再び高まったが、その際、外資系銀行はかつての chop loan のような対錢莊短期融資を再開しなかつた。ヨーロッパで第一次大戦が勃発したために、銀の大量輸出がつづき、これに中国商品の輸出の増大による好況が加わつた。そのため、金融市場での資金需要は常に高い水準を維持した(第2図)。

一方、高まった資金需要は金融業に新規投資を引き寄せた。20世紀初頭からはじまつた阿片

27) 「正元」錢莊の大株主である陳逸卿は、洋行両社と外資系銀行一社の買弁を務めた同時に慶余洋貨号をも経営していて、「兆康」錢莊にも投資していた。陳達生は「謙余」錢莊を擁すると同時に、「陳元利」生糸商店の主でもあつた。戴嘉宝はドイツ系洋行の買弁でありながら、「兆康」錢莊に出資し、取締役を務めていた。同上書、117頁。

28) 『上海錢莊史料』94, 188頁。

第6表 上海錢莊行數，総資本額増加統計（単位：銀元）

年 度	行 数	資 本 額	%	一行当たり 平均資本額
1912	28	1,488,000	100	53,100
1913	31	1,684,000	113.1	54,300
1914	40	2,049,000	137.7	51,200
1915	42	2,161,000	145.2	51,500
1916	49	2,829,000	19.0	57,700
1917	49	2,829,000	190	71,000
1918	62	4,390,000	295	71,000
1919	67	5,295,000	355.8	79,000
1920	71	7,768,000	522	109,400
1921	69	8,431,000	567	122,000
1922	74	10,797,000	725	145,900
1923	84	14,502,000	874.6	172,000
1924	89	16,625,000	1,117.2	186,700
1925	83	16,659,000	1,119.5	200,800
1926	87	18,757,000	1,230.6	215,600

出所：『上海錢莊史料』191頁

商人と染料商人との錢莊業への投資は、この時期に入るといよいよ本格化した。1913年から1926年までの間に阿片商人によって設立された新規錢莊は31行に達し、投下資本総額は200万両と推定される。染料商人も、1916年以後1930年代初頭までに26行が開設され、投下資本総額は銀126万両、銀元16万5千元にも達した²⁹⁾。

1914年から始まった第一次世界大戦の時期には、軽工業品に対する国内外の需要を満たすために、上海では多数の民族資本の工場が新設された。繊維製品、食品・嗜好品などを中心に、国産品が輸入品に代替していった。この貿易と工業との発展、そして前述の新規資本の投入により、錢莊業は確実に回復した（第6表）。

同じ時期、後述のように中国系商業銀行も著しい発展を遂げた。中国系商業銀行の発展が、錢莊にとって打撃になったのではなく、むしろ、業務拡大の機会をもたらしたことに注意しなければならない。中国系銀行は、銀行間の手形交換所³⁰⁾が1933年まで存在しなかったため、特

定な分野では、錢莊間の手形交換所（匯劃總會）を利用しなければ、対顧客あるいは同業者間の決済を遅滞なく行なうことができなかった。したがって、各銀行は一部の資金を錢莊に預け、決済業務を錢莊に委託するのが一般的であった。（第3図）。

その結果、錢莊は提携先銀行から決済目的で預けられた低利の預金を、高利で商工業者に貸付することができた。そのため、上海金融市場の金利水準は錢莊の動向によって左右されたのである。新設された中国系商業銀行は、錢莊の

て組織され、中国系有力銀行が加入した外国銀行公会の手形交換所である。前者の手形は「匯劃」（振替）で決済され、現金払いは当日ができず、翌日となるのである。後者の手形は「劃頭」（現金払い）で決済され、当日に現金払いされる。当時の金融機関は会員錢莊、外国銀行公会会員銀行で当座預金口座を開き、手形交換をその両者に委託したのである。外国銀行公会の手形交換所で取り扱われた手形の金額は不明だが、「匯劃總會」での金額はかなりの額に達していた。

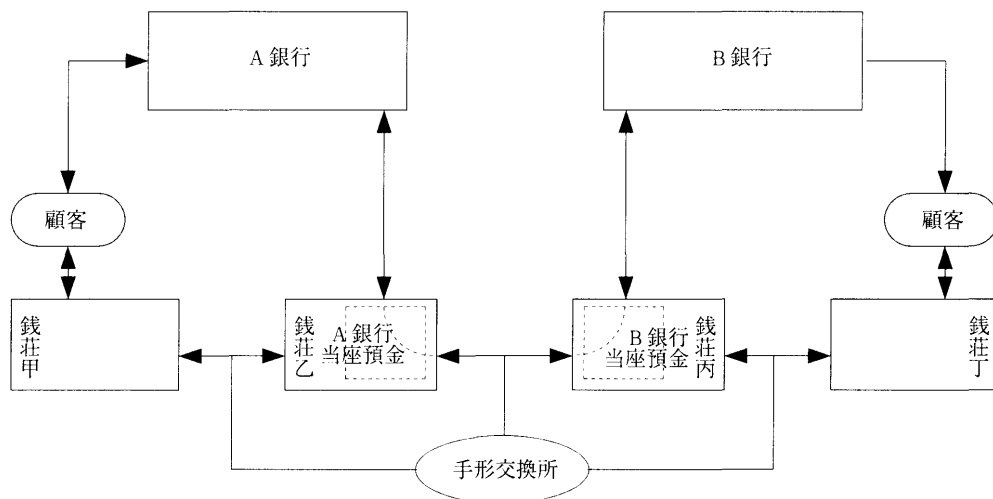
年度	銀両（千両）	銀元（千元）
1925	7,215,373	1,189,499
1926	8,838,503	1,591,054
1927	8,134,710	1,508,441
1928	9,336,835	1,857,521
1929	10,463,164	2,309,692

楊蔭溥『中国金融論』，商務印書館，1930，262頁

29) 『上海錢莊史料』105頁。

30) 1933年以前、上海における金融機関の手形決済、交換所は二つある。一つは錢業公会の会員錢莊のみ参加できる「匯劃總會」であり、もう一つは外資系銀行によつ

第3図 中国系商業銀行と錢莊との間の手形取引関係



地域商工業との密着性を重視し、錢莊にかつて外資系銀行が行なった chop loan のような短期融資の代わりに、短期預金の形で融資を行った。その結果、1920年前後から、錢莊は中国系商業銀行の資金供給に頼るようになったのである。そのほか錢莊は、発券業務を行う中国系商業銀行との協定に基づいて、これら中国系有力銀行の発券下請機関ともなった。

またこの時期、錢莊の同業組織は、それまで明文化されていなかった慣行をまとめて、「錢業公会章程」と「営業規則」を公布し、錢莊の業務規則を正式に定め、上海金融市場の安定成長に貢献した。

以上見てきたように、1911年までは外資系銀行の資金供与を受けて、いわば金融市場における「小売り」業者としての役割を演じていた錢莊は、1910年代前半の停滞期を経て、1910年代後半以降は、主たる取引相手を中国系商業銀行に変えつつも、再び金融市場における「小売り」業者としての機能を担うに至ったのである。第一次大戦期間中における上海の対外貿易、国内商工業の発展によって、上海の金融体制では銀行対錢莊といった従来の基本的構図が再び出現した。ただし、今度は中国系商業銀行と錢莊との組み合わせにおいてであった。

(2) 伝統的金融業の発展—福康錢莊の事例

以上、1920年代末期までの錢莊の再生と発展とを概観した。中国系商業銀行の台頭により勢力圏が塗り替えられつつある上海金融界において、錢莊が依然活躍の場をもっていたことが明らかとなった。以下では、主に『上海錢莊史料』に収録された福康錢莊についての資料に依拠しつつ、19世紀末から1920年代にかけての上海の代表的錢莊の活動を取り上げて、伝統的金融機関が上海の金融業発展に果たした役割を見ておきたい。

福康錢莊は上海錢莊業の名家程氏一族が所有する錢莊の一つとして知られた。19世紀半ばごろ、一代目の程衡齋は蘇州で質屋、錢莊の経営で成功をおさめた。太平天国軍が蘇州を占領した時、四男の臥雲が10万両の資金を携えて上海に移り、錢莊業を営みはじめた。福康錢莊は程臥雲の孫、程觀岳、程靄士二人の合同出資によって1894年に設立され、1947年株式会社となり、共産党政権成立後の1952年にまで営業を続けた。当初の資本金の2万両、10株のうち、程觀岳が1万6千両、8株を所有し、残りの2株、4千両は程靄士の出資であった。「福康」錢莊が新設された時には、程家はすでに上海で「協大」、「永康」、蘇州で「順康」、「鴻源」といった有力錢莊を擁し、上海錢莊業における程

家系錢莊の信用も良好であった。それゆえ、福康錢莊の滑りだしは良く、1896年には初の純益を出し、その年の預金総額は10万両に達した³¹⁾。

日清戦争（1894～95）後、すなわち「福康」錢莊が設立されて間もなく、上海で製糸工場が急増し、毎年春に行なわれた原料繭の買付け資金に対する需要も高まった³²⁾。蘇州近辺は原料繭の産地である。蘇州で大きな錢莊を所有していた程家では、現地の原料繭、生糸の生産者、販売商人とのつながりも相当深かったと考えられる。また、初期の福康錢莊は繭、生糸の買付けに対する融資を重点的に行なったという記録³³⁾が残っていることから、製糸金融が福康錢莊の初期貸付業務に重要な位置を占めていたと推定される。程家が、福康錢莊を対生糸業融資の専門機関として設立し、製糸金融で事業を拡大しようという経営方針をもっていたと考えられるのである。

原料繭の買付けに対する多額の融資の供与では、福康錢莊の貸付総額に占める抵当貸付の割合は、1902～1907年間で平均で45%に維持されていた。近代的銀行業に近い形で健全な経営が行なわれていたのである。1907年以後1924年までの資料は得られないので、その時期の前後に行なわれた貸付の内訳を参考にすると、1910年代に入ってから、福康錢莊の貸付業務における抵当貸付の比重はさらに上昇していたと推測できる。こうした堅固な経営基盤を有していたため、1910～11年、史上最大の金融危機が上海金融界を襲った際には、福康錢莊もその影響を被ったものの、1911年度の純益は開業後の最高水準に達し、翌年には、資本金を8万両へと増資することが可能となったのである。

1910～20年代の上海における諸産業の発展とともに、当初の製糸業中心であった福康錢莊の貸付も、綿紡績、毛織業、食品製造業などへと拡大した。したがって、綿糸、綿布等の商品、

および工場建物などの不動産を担保とする抵当貸付は、1905年以後増加の傾向が著しくなった。1902年、中国通商銀行は福康錢莊に預金をしはじめた。1907年まで、福康錢莊に資金を預ける中国系銀行は中国通商銀行のみであった。これは、当時の上海金融市場における中国系商業銀行の弱い立場を如実に物語っていた。1920年代以後、上海商工業の発展とともに成長した中国系商業銀行は、錢莊に対する資金融通を増やした。1930年の時点で、中国系商業銀行は福康錢莊に132万両を預けており、福康錢莊の最大の資金供給者であった（第7表）。それと同時に、福康錢莊は上海周辺の都市にある中小錢莊の上海総代理店としての役割を担い、これらの中小錢莊から決済業務を目的とした預金を受け入れた。特に、繭産地、あるいは製糸業が集中している蘇州、湖州、俠石、紹興、杭州、震澤、南潯、平湖などの地方都市の錢莊との「資金往来」が多かったとみられる。

福康錢莊の経営に示されたように、1920年代には、錢莊は商工業者の双方に資金を供給するようになった。錢莊が単純な商業金融の担い手である時代はもはや過去なものとなった。銀行の預金吸収力には及ばないが、その代わりに錢莊は商工業との強いつながりを武器にして、銀行の預金の一部を再吸収し、これを効率よく運用して商工業の資金需要に応えたのである。このような時代の変化に応じた経営の変革は、錢莊を地方銀行、業種専門銀行へと変身させていく可能性を作り出していった。こうして、1920年代以後、伝統的金融機関は銀行との共存を図りつつ発展していったのである。福康錢莊はその典型であった。

1910年代半ばから20年代にかけて上海の工業は急速に発展した。従来、商業金融に基盤をもつ錢莊は、これを契機にして、産業金融の分野にも進出しはじめた。錢莊のこうした動きは、上海の伝統的金融機関が経済の構造的変化に対して高い適応能力を持っていたことを如実に証明している。この適応能力こそ、錢莊が1920年代以後も上海金融市場で引き続き重要な役割を

31) 『上海錢莊史料』774～775頁、778頁。

32) 曾田三郎、『中国近代製糸業史の研究』汲古書院1994、156頁。

33) 『上海錢莊史料』780～783頁。

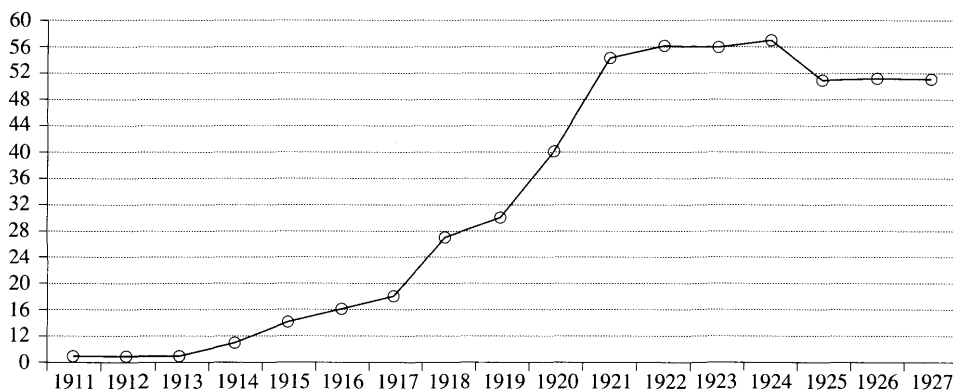
第7表 『福康』 銭荘同業往来内訳

(単位：両)

年度	上海 銭 荘		外 地 銭 荘		中国系銀行		外資系銀行	
	借入,口座入金	貸 出	口座入金	貸 出	借入,口座入金	貸 出	借 入	貸 出
1896	85,089		7,571	122,076			40,910	
1898	19,784		54,792	30,000				
1899	4,315	55,000	87,130	13,211			15,000	
1900	41,665		29,967					
1901	43,577		31,968	132,940				
1902	34,403	130,000	47,848	33,500	5,025			
1903	142,263	15,000	84,304	15,428	30,223		20,000	
1904	498,659		31,255	194,599	5,000			
1905	50,121		13,999	120,093	56,450			
1906	35,955		26,922	53,869	50,500		34,000	
1907	95,168	37,607	9,002	58,742	45,219		102,800	10,109
1925	85,201	71,300	384,458	123,527	297,536	114,717		50,000
1926	306,194		591,780	173,361	469,199	150,798		20,000
1927	172,744		499,560		357,367	22,123		75,590
1928	186,187		341,527	378,810	530,158	181,857		
1929	155,040		219,568	366,388	918,831	326,770		50,000
1930	292,950	8,088	294,474	136,663	1,320,537	385,161		

出所：『上海銀荘史料』788～791頁

第4図 上海における中国系銀行数 (1914～1927)



演じえた最大の要因であると考えられる。

2. 中国系商業銀行の成長と外資系銀行の再編

(1) 中国系商業銀行の成長 (1914～1927)

上海における1910年代以降の中国系銀行の発展を設立数で見ると、1914年以後1922年までには著しい増加傾向にあり、特に1918年以後1921年までの3年間には急増している(第4

図)。1922年後、その数はほぼ一定となり、1924年以後、総数は減少したものの、1920年代末期に至るまで50行前後で安定した。

1914から1922年の間、銀行数は毎年増加した。いくつかの銀行の純益統計をみると、特に一次大戦末以降の時期に、中国系商業銀行が急速な発展を遂げたことが明白である(第8表)。国内の辛亥革命と国外の一次大戦とは、上海の中

第8表 若干銀行純益表 (1914～1920)

(単位：万元)

銀行名	設立年度	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920
上海商業儲蓄	1915		0.45	3.34	5.01	9.48	22.87	40.65
浙江地方実業	1915		1.49	11.3	11.23	9.26	13.55	29.16
新華信託儲蓄	1915				21.57	26.81	35.89	69.69
塩業銀行	1915		6.71	26.72	48.88	80.52	119.02	165.51
広東銀行	1912					36.73	52.77	114.96
中華商業儲蓄	1912					5.77	9.65	11.49
中孚銀行	1916				22.76	13.04	22.21	28.49
大陸銀行	1919						22.79	44.13

出所：『金城銀行史料』10頁

国系商業銀行に発展をもたらした重要な外的要因であると考えられる。辛亥革命後、中国では上海を中心に全国的な工場設立ブームがおこった。そのさなかの1914年には、第一次世界大戦が勃発し、欧州諸国からの輸入が途絶した。その結果、一部では日本からの輸入が増大したが、1915の「二十一条」反対運動、1919年の「五四運動」の際の日本製品排斥もあって、中国産の日用工業製品の需要が伸長した。その結果、中国の民族工業は急速に発展した。国産工業品の需要増大に伴って商業部門も活気づき、資金需要も急増した。上海の中国系商業銀行は、商業分野の荷為替業務などの業務を契機に発展の軌道に乗り、次第に企業への貸付業務をも拡大していったのである。

一次大戦とロシア革命の影響を受け、独亜銀行、露清銀行など有力外資系銀行が没収あるいは清算された。これにより、外資系銀行全体の信用は相対的に低下した。さらに国民の民族感情の高揚が加わって、上海市民は新設の自国の商業銀行によろやく預金をするようになった。それ以後、一般市民の預金が中国系商業銀行の経営基盤を支えるようになったのである³⁴⁾。

1922年以後1927年までの時期は、中国系銀行の安定成長期であった。政治的には、中国国内の権力闘争が一頂点に達し、各地で起こった戦乱は各行の現地支店を一時閉鎖に追い込んだが、上海本店、支店の業務には支障が出ていなかった。この時期には、各中国系有力銀行は内部組織、管理機能の強化に努めた。貸付面では、各

銀行が不動産、外資系企業、民族系企業に融資を行った。同時に、銀行は預貯金の吸収を最も重視し、サービス内容の充実によって引き続き預金額を増やした。1928年の調査では、中国系銀行の総資本額は6億元余りであり、1億1千万円と推定される銭荘の総資本額を大きく上回った³⁵⁾。

(2) 中国系銀行業発展の内在的要因

—上海商業儲蓄銀行の事例

1912～1927の間、中国系商業銀行の発展は銀行自身の努力によるところが大きかった。極めて小資本で出発した銀行も、経営努力によって社会的需要にうまく応えられた場合に、大きな金融機関にまで成長することができたということが注目される。このような銀行の典型は上海商業儲蓄銀行である。この銀行は1915年、10万円の資本金で設立された。開設の時、実際に支払われた資本金額は5万元にすぎない³⁶⁾。創業者の陳光甫(1880～1976, Wharton School of Financial & Commerce, Univ. of Pennsylvania 卒)は小資本の銀行でも、社会に良質のサービスを提供すれば、競争力を持ちうるという経営理念を持ち、自らの銀行経営でこれを実践した。

開業後、上海商業儲蓄銀行は預金の獲得に力

34) 金城銀行上海支店の調査により、中国系商業銀行の最大預金額は中間市民層である。『金城銀行史料』141頁。

35) 楊蔭溥『中国金融論』, 商務印書館, 1930, 68, 79頁。

36) 姚松齡, 『陳光甫的一生』伝記文学出版社, 台湾, 1984, 19頁。

を入れ、銀両と銀元を混用できる銀行預金口座を上海ではじめて市民に提供した。同時に、上海商業儲蓄銀行は営業手続きを簡素化し、顧客の利便性を追求した。上海商業儲蓄銀行のこうした経営努力は報われ、預金総額は、1915年の開業当初の57万元から5年後の1920年には1063万元へと急増した³⁷⁾。

上海商業儲蓄銀行は当初、上海近辺の鉄道沿線の物流拠点に出張所を設け、荷為替業務を中心に営業拡大を図った。営業が軌道に乗った1917年からは、綿紡、製粉企業を中心に抵当貸付を行なうようになった。上海商業儲蓄銀行は、商工業に対する一般貸付に関して抵当貸付を提唱していたが、銭荘の信用貸付の手法をも積極的に取り入れ、弾力的な資金運用を行なった³⁸⁾。

国際貿易の中心地にある上海商業儲蓄銀行は、開業当初から外国為替業務を重視する立場を取り、外資系銀行の外国為替取引独占の打破を目標の一つにしていた。陳光甫は自ら外国人専門家に外国為替業務を学び、銀行職員を海外で訓練させるほか、閉鎖された独亜銀行天津支店の元支配人 Gustav Barwald を高給で雇って、外国為替業務の指導と職員の訓練に当たらせた。1919年、上海商業儲蓄銀行は外国為替業務を開始したが、取扱い量は順調に拡大し、海外業務は銀行の重要な業務となった³⁹⁾。こうして、「社会服務」、「補助工商実業」、「發展国際貿易」⁴⁰⁾を目標として掲げる上海商業儲蓄銀行は、設立後6年目の1920年になると、すでに行員二百人、11箇所の支店、資本金額250万元、預金総額1340万元⁴¹⁾の中国有数の商業銀行へと成長したのである。1921年以後もこの銀行は成長し続け、上海での中国系商業銀行の発展に重要な貢献をした。

37) 同上書、21頁。

38) 上海商業儲蓄銀行初期の信用貸付金額について不明だが、1932～1936年間の信用貸付額は総貸付額の22%を占めるとの報告があった。同上書、32頁参照。

39) 同上書、37頁、洪霞管、張繼風「上海成為旧中国金融中心的若干原因」『中国近代經濟史研究資料第3冊』42頁。

40) 上海商業儲蓄銀行社訓。姚松齡、前掲書、41頁。

41) 同上書、26頁。

(3) 商業銀行の勢力増大

1911年の共和制移行後の中国の国家権力構造においては、北京の中央政府の統制力は低く、そのため政府は当初、財政・金融政策に取り組んだものの、長期的には成功しなかった。政府の弱体とは対照的に、民間銀行は自ら所在地の金融業の安定成長に力を入れ、政府の財政・金融政策に強く抵抗するようになった。その典型的な例は、1916年に北京政府の紙幣と銀元との両替停止命令を中国銀行上海支店が拒否したことである。当時、北京政府は現銀の枯渇を恐れて、中国銀行に両替停止の命令を下したのであるが、中国銀行上海支店の責任者である宋漢章と張公権とは、上海金融市場における同行の信用維持の重要性、関係銀行や銭荘の正常な経営の維持、外資系銀行との関係などを考慮し、同支店が外国租界にあることを利用して敢えて北京政府の命令を拒否したのである。その後、中国銀行民間出資者連合会が組織され、中国銀行上海支店の全権を掌握し、両替を継続させた。その後、中国銀行の民間所有の株式の比率が増えた。1923年の時点で中国銀行は1971万元の資本を有していたが、政府所有分は僅か5万元でした。交通銀行の場合も同様で、政府所有株は全資本額の十分の一に過ぎなくなっていた⁴²⁾。結局1910年代末期からは、中国銀行と交通銀行は、国家銀行としてではなく、巨大な商業銀行として上海金融市場に屹立することになったのである。

国家の統制から自立した、独自の経済基盤を、上海経済界は有するに至っていたことにつれ、中国系銀行の同業組織である「上海銀行公会」も有力な中国系商業銀行間の連携と協調とに立脚しつつ、準中央銀行的な機能を発揮しはじめていたのである。

徐滄水編『上海銀行公会事業史』によれば、「上海銀行公会」は1918年7月に正式に設立された。中国、交通、浙江興業、浙江実業、上海商業儲蓄、金城など上海にある有力中国系銀行

42) 洪霞管、張繼風、『近代上海金融市場』上海人民出版社、1989、18頁。

のほとんどが参加していた。翌年の二月、各会員銀行の共同出資によって準備金制度が発足した。1920年、銀行用語と営業規則の統一を目指して、公会は「銀行会計名詞研究」を刊行し、また「上海銀行営業規程」を公布した。さらに同年12月には、財政政策の確定、内国公債の整理、幣制統一を公会決議の形で北京政府に要求した。その他、第一次大戦後に上海で発生した取引所乱設の投機ブームに対して公会は各会員銀行に自粛を求め、金融市場の秩序維持に尽力した。そして、中央銀行が出現するまでは実現が困難であると目されていた幣制改革、銀行間の手形交換所・信用調査所の設立などの事項について、会員銀行の綿密な事前調査と準備工作とに基づき公会名義で草案を作成し、かつこれらの活動の目標は1930年代に実現した。中国では、銀行法などの経済関連の法制度の整備は、1920年代まではほとんど行われていなかった。こうした状況のもとでは、公権力を代替するような銀行公会の、ならびに前述の錢莊業の同業団体の活動は、上海が金融センターとしての地位を確実なものとするうえで不可欠であった。

(4) 外資系銀行の再編

第一次世界大戦の結果もたらされた上海の外資系銀行の再編は、注目に値する。独、露系の銀行は姿を消し、フランス系銀行の一つである中仏実業銀行もパリ本店の倒産の巻き添えとなって閉店に追い込まれた。その代わりに、日系および米系の銀行の積極的な上海進出が目立つ。

1916年住友銀行、1917年には三菱銀行と三井銀行、1918年に朝鮮銀行と、日系の銀行が続々と上海で支店を開設した。他方の米系銀行の対中進出もかなり活発に行われていた。1918年、American Oriental Banking Corporation 美豊銀行、1919年、Asia Banking Corporation 友華銀行、The Bank of Philippine Islands. 菲律賓銀行、American Express Co. 運通銀行、1921年、Equitable Eastern Banking Corporation 大通銀行、と相次いで上海に支店を開設

したのである。

日米両国の銀行の進出ぶりとは対照的に、新規に出店した有力イギリス系銀行は、P&O Banking Corporation 大英銀行一行のみである。しかし、長年中国で活躍していた Hongkong & Shanghai Banking Corporation 匯豊銀行、Chartered Bank of India, Australia, & China 麦加利銀行などの有力なイギリス系銀行は、上海の金融市場において依然として重要な役割を發揮し続けており、とりわけ外国為替分野においては圧倒的な影響力を保持していた。

以上の経緯を経て、1925年の上海金融市場では、預金総額に占める比率は、中国系商業銀行42%、外資系銀行25%、錢莊33%となっていた。総資本力では、中国系商業銀行が40.8%、外資系銀行が36.7%、錢莊が22.5%をそれぞれ占めていた⁴³⁾。三者は、1920年代の上海金融市場においてそれぞれ異なった機能を分担し、相互補完的な関係に立っていたのである。

結 語

19世紀半ば以後、上海における内外貿易の発展とともに成長した上海金融市場は、外資系銀行と錢莊との相互依存関係を基盤に、貿易金融の枠組みを形成した。両者の機能的な結合に立脚して、上海の金融センターとしての初期の基盤が作り上げられたのである。錢莊は、現地事情を熟知した伝統的金融機関としての優位を生かして、金融情勢の激しい変化に対応し、上海金融市場において重要な地位を堅持した。錢莊を代表とする伝統的金融業は上海に近代的銀行制度の導入を可能にする一大金融体系の基礎となり、中国系商業銀行の誕生の母体としての役割を發揮した。

他方、外資系銀行は、錢莊を介して現地の商業活動と結び付き、貿易金融の一環を握ることによって大きな発展を遂げたのである。これらの銀行が、中国に近代的銀行制度の導入、上海の国際金融センターの性格付け、商業銀行とし

43) 張仲礼主編『近代上海城市研究』293頁。

て商工業の資金調達に寄与したことも否定できない。したがって、各国の植民地政策との密接なつながりが時期によっては存在したにせよ、外資系銀行を単純に「経済侵略の重要な一環」と規定して、その意義を全面否定することはできないであろう。

それにかわって、第一次大戦以降、中国系商業銀行が上海をはじめとする中国各地の工業発展を原動力として、急速な成長を遂げた。逆にまた、この中国系商業銀行の発展が、民族商工業の一層の発展を促したのである。従来、中国の近代的金融業については、その発展の「畸形的」側面を強調する見方が一般的であったが、少なくとも上海については、これは妥当しない。上海の中国系銀行は、中国の国家権力の弱体を民間企業の自助努力で補い、地域の利害に立脚しつつ銭荘との間に「卸小売り」関係を結びながら発展過程の主導権を握り、上海金融センターの成長に貢献したのである。

主要参考文献

- 香川峻一郎『銭荘資本論』, 1947
- 石井寛治「イギリス植民地銀行群の再編——1870・80年代の日本・中国を中心に——」『経済学論集』(東大経済学会) 第45巻第3号, 1979
- 浜下武志『中国近代経済史研究』東大東洋文化研究所報告, 1989
- 浜下武志『近代中国の国際的契機』東大出版会, 1990
- 曾田三郎『中国近代製糸業史の研究』汲古書院, 1994
- 西村閑也「中国における国際銀行業1890—1913」法政大学経営学会, 経営志林第32巻第4号『上海銭荘史料』上海人民出版社, 1960
- 徐義生編『中国近代外債史統計資料』中華書局, 1962
- 『中国第一家銀行—中国通商銀行初創時期(1896-1911)』中国社会科学出版社, 1982
- 汪敬虞『十九世紀西方資本主義对中国的經濟侵略』, 人民出版社, 1983
- 汪敬虞「十九世紀外国在華金融活動中的銀行和洋行」『歴史研究』, 1994
- 張仲礼主編『近代上海城市研究』上海人民出版社, 1990
- 楊蔭溥『上海金融組織概要』, 商務印書館, 1930
- 楊蔭溥『中国金融論』上海黎明書局, 1931
- 『金城銀行史料』上海人民出版社, 1989
- 姚松齡『陳光甫的一生』伝記文学出版社, 台湾, 1984
- 洪葭管, 張繼風「上海成為旧中国金融中心的若干原因」『中国近代經濟史研究資料第3冊』
- 洪葭管, 張繼風『近代上海金融市場』上海人民出版社, 1989
- 徐鼎新, 錢小明『上海總商会史1902~1929』上海社会科学院出版社, 1991
- 唐振常主編『上海史』上海人民出版社, 1989